

怪帰師のお仕事②

さとう
佐東みどり・作

とねり
榎のと・絵



アルファポリスきずな文庫

さい じょう こーえ
最上湖江

こう いち ろう
光一郎の
もとつう やく こう ほ
元通役候補で、許嫁。

瀬戸由香里

ことば
琴葉たちのクラスの学級委員長。
がっこう ゆういん いんちょう
絵を描くのが好き。

もり なが か すみ
森永夏純

ことば
琴葉の親友で
はや
流行りものに強い。
とし でんせつ うわさ すけ
都市伝説や噂が好き。

はう どり かず や
服部和也

ことば
クラスのムードメーカー。
あか げんき うんどう しんけい ばつくん
明るく元気で運動神経抜群。

あま くさ こう いち ろう
天草光一郎

てんこうせい
クールでイケメンな転校生。
かい もと ぱしょ かう
怪を元いた場所に帰す、
かいがえ し しごと
怪帰師という仕事をしている。

登場人物

とお の ことば
遠野琴葉

あか げんき しょうがく ねんせい
明るく元気な小学6年生。
せい ざかん つよ
とてもやさしく、正義感が強い。
つうやく しごと すこ
通役の仕事に少しづつ
な 慣れてきたけど……

たぬ吉

えき まえ いさか や みせ さき
駅前の居酒屋店先にいる、
しがらき やさか かい ふる
信楽焼の怪「古ダヌキ」。
ことば こう いち ろう そうだん あいて
琴葉や光一郎のよき相談相手。

だいいちわ

第1話 白い帽子の女

琴葉と光一郎



（ほんとに、どうすればいいんだろう）
日曜日。小学校六年生の遠野琴葉は自分の部屋にいた。
テーブルの上にはノートが置かれ、算数の問題が書かれている。
琴葉はテーブルの前に座り、明日行われる小テストのための勉強をしていたのだ。
しかし、持つてある鉛筆は先ほどからまつたく動いていない。答えがわからないのでは
ない。そもそも問題すらちゃんと見ていなかった。
すべては先日たぬ吉が言った、あの名前せいである。
たぬ吉は、琴葉の住んでいる町に古くからすむ古ダヌキの怪だ。人々に迷惑をかけるこ

となく、怪帰師にも協力している。天草光一郎のことも昔から知っているようだ。

そんなたぬ吉が言うには、光一郎はこの町に来たとき、落ち込んでいたとのこと。

怪帰師である光一郎の相棒となるはずだつた通役候補と何かがあつたせいらしい。

そしてそれは光一郎の幼なじみの女の子だつた。

彼女の名は、最上瑚江。

(何があつたんだろう……)

琴葉はたぬ吉にその理由を聞こうとしたが、「それ以上くわしい話は、わての口からは言われへん」と言つて教えてくれなかつた。

(光一郎くんに直接聞ければいいけど……)

琴葉はそう思いながらも、すぐに首を横にブンブンと振る。

そんなことできるわけがない。

「だつて、彼女は光一郎くんの——」

「僕の、どうしたんだい？」

「え、あつ！」

その声を聞き、琴葉はハツとなつた。

琴葉のとなりには、白い肌に大きく澄んだ目とシユツと通つた鼻筋、りりしくて綺麗な唇を持つ少年が座つていた。

サラサラとした銀髪の髪を揺らしながら、琴葉をのぞき込むように見ている。

この少年が光一郎だ。

「ええつと、あの——

「さつきから全然問題を解いてないけど、僕の説明はやつぱり下手かな？」

「え、あ、ううん。上手！」大山先生の十倍、ううん、百倍わかりやすいよ！」

琴葉はあわてて笑顔を作つてそう答えた。

光一郎は琴葉が算数を苦手だと知つて、勉強を教えるよと言つてくれたのだ。

運動神経もいい上に、勉強もできる。
少し頼りないところもあるけれど、見た目も性格も完璧すぎるほど完璧だ。

(そんな光一郎くんが、わざわざ日曜日に家に来てくれたのに)

琴葉は瑚江のことばかり考え、まったく集中できない自分が情けなくなつた。

そのとき、部屋のドアが開いた。

「こんにちは～」



琴葉の母親が、ニコニコしながら部屋に入つて来た。

「光一郎くん、さあ、ジュースを飲んで。お菓子もあるわよ。チヨコとおせんべいどっちがいい?」

「ちよつと、お母さん!」

「琴葉、そんなところに立つたら光一郎くん立つた。」

「琴葉、そんなに立つたら光一郎くんが見えないじゃない?」

「見in必要ないでしょ」

「どうして? 娘のボーカフレンドをチェックするのは母親の義務でしょ」

「ボボボボボーカフレンド?????」

琴葉は顔を真っ赤にすると、母親に迫つた。
 「光一郎くんは、ただのお友達だから!」
 「またまた、そういうのはいいから。お父さんもちゃんとチェックしろよ~って天国で言つてるはずよ」

「そんなの言つてないし! いいから出て行つて!」
 琴葉は母親の背中を押すと、部屋の外へ追つ出した。
 「ああ、ジュースとお菓子——」

「さつき私が用意したのがまだあるから! ほら、外に出て!」
 琴葉は母親を部屋の外に完全に追い出し、ドアを勢いよく閉めた。

「まつたくも~」
 「琴葉ちゃんのお母さん、いつもあんな感じなのかい?」

「お父さんが亡くなつてから、ますますひどくなつたかも」
 三年前に亡くなつた父親はいつも琴葉を優しく見守つてくれた。

けれども、母親は正反対だ。
 「ふと、光一郎が尋ねた。
 「琴葉ちゃんのお母さん、いつもあんな感じなのかい?」

「お父さんは、さつきみたいにズカズカと部屋に入つて来ることなんかなかつたし、ああいうデリカシーのないこと『言わなかつたもん』」

琴葉は母親のそういうところがちよつぴり苦手だつた。

「ほんと、お母さんつてどうしてあんななんだろう」

それを聞いた光一郎がほほ笑みながら答えた。

「僕は、琴葉ちゃんのお父さんもお母さんも、素敵な人だなつて思うよ」

「お母さんも？」

「ああ。僕は親とあんな風に親しくはなかつたから」

「光一郎くん……」

光一郎の一族は代々怪帰師をしていて。

彼が実家でどのような生活をしていたのかは聞いたことがない。

それでも、電話のやり取りを見ていて、光一郎の父親は厳しそうな気がした。

も厳しい人なのかもしれない。

（それに、光一郎くんは、今ひとり暮らしだもんね）

この町に来たのも、怪を元の世界に帰し、怪帰師として父親に認めてもらうためだ。

母親

（光一郎くんが認めてもらえるために、私も力にならないと）

怪の多くは人間の世界に現れると、人々に災いを与える。

違う世界の存在であるため、人間がいくら攻撃してもダメージを与えない。

怪を元の世界に帰す怪帰師という仕事が生まれた。

怪帰師は怪と交渉し、元の世界に帰つてもらうのが役目だ。そのためには怪が帰るのを

納得する『願い』や『条件』を聞き出し、かなえる必要がある。

けれど、怪帰師は怪を元の世界に帰す『光の扉』を開く力はあつても、怪の言葉はわか

らない。そこで、怪の言葉がわかる『通役』の存在が必要となる。

琴葉はその通役として、光一郎の相棒になつたのだ。

（だけど……）

琴葉は、先ほど思わず口に出した言葉を思い出した。

彼女は光一郎くんの――

光一郎が住む家には、写真立てがあつた。

そこには光一郎と、通役になるはずだつた幼なじみの瑚江が一緒に写つていた。

そんな瑚江に何かが起り、彼女は光一郎の通役にはならなかつた。

その理由を知りたい。でも、光一郎には聞けない。

（だつて、最上さんは光一郎くんの――、許嫁だから）

琴葉は沈痛な表情になると、小さくため息をついた。

「どこか、わからないところがあるのかい？」

光一郎が、琴葉にそう言う。

「えつ、あ……」

光一郎は、琴葉が算数の解き方がわからず悩んでいると思つていてるようだ。

「そうじやないよ。そういうことじやないんだけど……」

それ以上は、やはり何も言えない。

琴葉は勉強に集中できないまま、ノートに書かれた算数の問題を力なく見つめるのだった。

その頃。

ひとりの女の人が路地を必死に走つていた。

白いワンピースを着て、ツバの広い白い帽子を被つている。

腰元まで伸びる長い黒髪が、激しく揺れていた。

女のは走りながら、何度も後ろを確認する。

誰かから逃げているようだ。

路地を曲がり、さらに曲がる。
だが次の瞬間、女的人は目を大きく見開いた。

袋小路になつていたのだ。

女の人は焦る。周りは家の塀があり、逃げ場はない。

そのとき、男の人たちの声がしてきた。

「こつちに行つたZ E！」

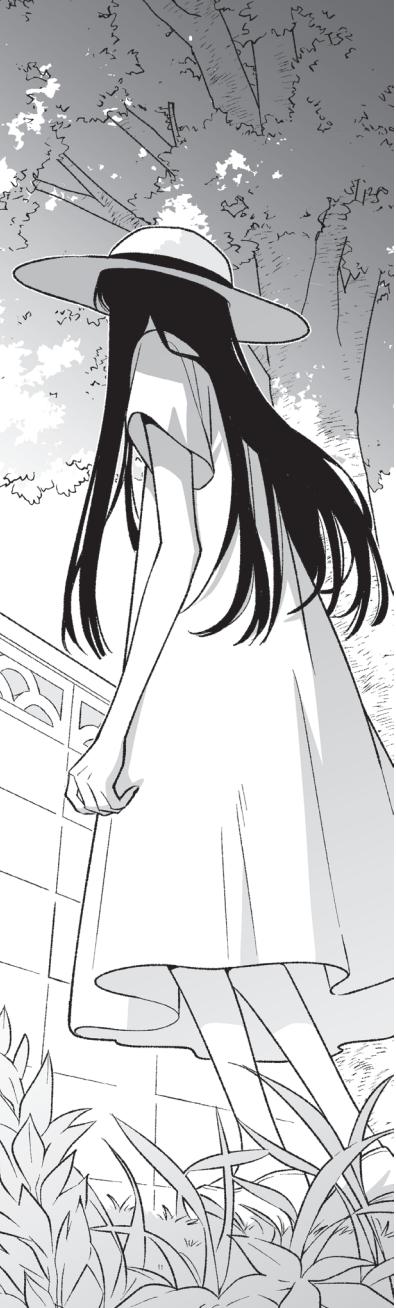
「今度こそ逃がさないY O！」

それを聞き、女的人はパニック状態になる。それでも、目の前にある塀をじつと見つめた。

刹那、一人の男が袋小路に駆け込んで来た。

小太りの青年と、細くてメガネをかけている青年だ。

一人は袋小路を見て、目をパチクリさせた。



そこには、誰もいなかつたのだ。
たれ

「そんな。こつちに行つたはずだZ.E.!?

ふたり ああ、逃げる場所なんてどこにもないYO!?

二人は、スマホを持つている。
がめん ふくろこうじ うつ

スマホの画面には袋小路が映つていて、動画を撮

ほかの場所を探そうZE!」
ぜつたい
つか
ヨ

絶対に捕まえてやるYO！」
ふたり どうが うつ

二人はスマホで動画を映しながら、来た道を戻つて行つた。

示。

かすかに声がした。
ふくろこうじ
へい
む

袋小路の塀の向こうに、木が見える。その木の枝が揺れていた。

木の陰から、先ほどの白い帽子を被つた女の人が姿を現した

女のは堺の上からそこと顔を出し
二ノかいなくな二のを畠詠すると
安堵の表情

と浮かべた。
すがた
みよう

だが、その姿は妙だ。

堀は二メートルほどの高さがあつたが、女の人の顔はおろか上半身まで、堀の上から

はつきりと見えていたのだ。

何かを踏み台にしているわけでも、ジャンプをしているわけでもない。

おんなひとは、ただその場に立つてゐるだけだ。

かせ
ふ
なか
くろかみ
ね
風が吹き、長い黒髪が揺れる。

女の人は風に飛ばされないように、被つた白い帽子を手で押さえた。

その手は、驚くほど長い。

長いのは、手だけではない。足も信じられないほど長い。

女の人は堀よりも、はるかに背が高かつた。

ボ、ボボボ……

それは、人間の言葉ではなかつた。

目撃された怪
もくげき

「はあ、まさかこんな点数になるなんて」

翌日の昼休み。

琴葉は六年二組の教室にいた。

自分の席に座り、手には四時間目に行われた算数の小テストがある。点数は、六十点だ。

「琴葉ちゃん、どんまい。そういうときもあるよ」

クラスメイトで親友の森永夏純が笑顔で言う。

「そうそう。僕なんか三十五点だし」

同じくクラスメイトの服部和也が、自分の小テストを見せながら笑つた。

一人とも琴葉を励ましてくれているようだ。

そんななか、琴葉のそばに立つていた光一郎が、ガツクリと肩を落とした。

「僕の教え方が悪かつたんだ……」

光一郎は悔しそうな顔で、拳を強く握り締めている。

「琴葉ちゃん、昨日あれだけ頑張つて勉強したのに。それなのに僕のせいで」

「だから違うつてば。教え方、すごく上手だつたよ」

琴葉はフオローするが、正直、瑚江のことばかり考えていて、光一郎の教え方が上手な

のかどうかはよくわからなかつた。

けれども、必死に教えようとしてくれたのは事実だ。

琴葉は彼に感謝していた。

すると、それを聞いていた夏純が、琴葉と光一郎の顔を交互に見た。

「もしかして琴葉ちゃん、光一郎くんに昨日勉強教えてもらつたの？」

「え、うん、そうだけど」

「どこで教えてもらつたの？」

「ええつと、私の部屋だけど」

「ラブラブすぎる～～！」

夏純はニヤニヤしながら琴葉に顔を近づけた。

「琴葉ちゃんつて奥手だと思つてたけど、けつこう積極的なんだね！」

「積極的つてあのねえ」

「なんだよなんだよ、二人は付き合つてるのか??」

和也も興奮ぎみに話に加わつてくる。

以前、トイレの花子さんを探しているとき、琴葉が光一郎と一緒にいるところを見かけ

て和也は同じようなことを言つてきた。

「お母さんといい、どうしてみんなそう思うのよ！」

光一郎と付き合つてると言わることは嫌じやない。でも、本人の前で言わわれるのはさ

すがに恥ずかしい。

一方、光一郎はガツクリ肩を落としたままで、夏純たちの話をまるで聞いていなかつた。

「光一郎くんも、いつまでも落ち込まないの！」

「いや、だけど

「今度教えてもらつたら絶対に百点取るから。だから自信持つて

「百点!?」

琴葉ちゃん、すごい！

僕、頑張るよ！」

「いや、頑張るのは私だし！」

夏純たちにもあきれるが、真面目すぎる光一郎にもあきれる。

だが、とりあえず光一郎は元気になつてくれたようだ。

そこへ、学級委員長の瀬戸由加里がやつて來た。

「夏純ちゃん、ちよつといい？」

「どうしたの？」

由加里はなぜか神妙な表情をしている。

夏純ちゃんに教えてもらいたいことがあるの。都市伝説の怪人のことなんだけど

「都市伝説の怪人??」

夏純は、おまじないや都市伝説が大好きだ。

そのため、由加里は話を聞きたいと思つたようだ。

「だけど珍しいね。由加里ちゃん、そういう話好きだつけ？」

「うん、好きとか嫌いとかじやないんだけど、友達が昨日不思議な人を見かけたって言うの」

「お、どんな人だつたの？？」

和也が興奮しながら尋ねた。和也もそういう話が大好きなようだ。

一方、琴葉は光一郎を見た。

光一郎はうなずき、由加里のほうに顔を向けた。

僕にも、その不思議な人の話を教えてくれるかな？」

その人は、怪を見た可能性がある。琴葉と光一郎はそう思つた。

由加里の話によると、最近通い始めた絵画教室で、中学一年生の女の子の友達ができるらしい。

その彼女が、昨日絵画教室に通う途中、不思議な女人を見かけたのだという。

「その女人の人、横断歩道の信号機に頭がつきそうになつてたらしいの」

由加里の友達は、そのとき横断歩道を渡つていた。

あれつてすごく上についてるよね？」

その横断歩道の向こうに、女人が立つていたという。
「その女人の人、横断歩道の信号機に頭がつきそうになつてたらしいの」
「信号機に？」

「あれつてすごく上についてるよね？」

夏純と和也が同時に驚く。

由加里はうなずくと、話を続けた。

私も絵画教室でその話を聞いた後、家の近くの信号機を見てみたの。二メートル五十五センチぐらいの高さがあつたから、多分、友達が見たのも同じぐらいの高さだと思う

「女人人は、それと同じぐらいの身長つてこと？」

「それつてまさか……」

と、光一郎がつぶやいた。その怪に心当たりがあるようだ。

しかし、由加里が言つた次の言葉で、光一郎は神妙な顔つきになつた。

「その人、友達に見つかると、すぐに逃げちゃつたらしいの」「逃げた、だつて？」

どうやら思っていた怪とは違うようだ。

一方、和也と夏純はその話を聞き、さらに驚いていた。

「そんな背の高い女人の人なんて、この町にいないよな?」

「うんうん、見たことない。都市伝説の怪人かも」

由加里も彼らの話を聞きながら、改めて恐ろしく思い、ごくりと唾をのみ込んだ。

そんな彼女に、光一郎が話しかけた。

「瀬戸さん。その友達に話を聞くことはできるかな?」

「え、ええ、できると思うけど」

「光一郎くんも都市伝説の興味があるんだ」

夏純が意外そうな表情で言う。

「それが、僕の仕事だからね」

「仕事? ?」

光一郎が何を言つてゐるのかわからず、夏純たちはキヨトンとする。

琴葉はそれを見て、あわてて話を割つて入つた。

「ええつと、とりあえず、放課後その人に話を聞きに行こうよ。そのほうが由加里ちゃん

も安心できるでしょ」

怪が本当にいることや、怪を帰すために活動している怪帰師を説明するのは大変だ。だが、情報を聞き出す必要がある。

「そうね。私も彼女が心配だし、そうしましよう」

琴葉たちは、学校帰りに由加里の友達に会うことにした。

放課後。

琴葉と光一郎は、由加里たちとともに友達の家へと向かつた。

「彼女は陣内菜奈といい、年上だが気さくで、由加里はすぐに仲良くなつたのだという。都市伝説の怪人と遭遇した人とほんとに会えるなんて、わたし、生きててよかつたかも」「僕も。こんな経験初めてだよ」

夏純と和也は怖がりながらも興奮しているようだ。

「私は、何かの見間違えだと思うんだけど。そういうのほんとにいるのかな」

先頭を歩く由加里が不安げにつぶやく。
(三人とも、実際に怪に遭遇しているんだけどね)

琴葉は、彼らを見ながらそう思つた。

夏純はテケテケに、由加里は赤マントに、和也はトイレの花子さんに遭遇していた。

だが、怪が元の世界に帰つたため、その記憶が消えたのだ。

「ここよ」

やがて、住宅地の一角で、由加里が立ち止まつた。

目の前に大きな家がある。

菜奈の家だ。

「そう、あの話を聞きたいのね」

由加里から説明を受けた菜奈は、琴葉たち五人を自分の部屋に招いた。

ちょうど学校から帰つて来たところらしく、制服のままで出迎えてくれた。

「急に来ちやつてごめんなさい」

由加里が謝ると、菜奈は「ううん」と笑顔で答えた。

「お話を聞いてくれるだけでもうれしいよ。お兄ちゃんなんて、『そんな女の人がいるわけない、お前、歩きながら寝ちゃつて夢でも見たんだよ』って言つてたもん」

学校の友達もまともに話を聞いてくれなかつたらしい。

「心配してくれたのは、由加里ちゃんだけだよ」

菜奈は「ありがとう」とほほ笑みながら礼を言つた。

部屋にはさまざまの人や動物の絵が飾られている。すべて菜奈が描いた絵らしい。

琴葉は「すご~い」と絵を見て感心する。

「菜奈さんは、絵画教室でもいちばん絵が上手なのよ」

由加里はそんな菜奈に憧れて、絵の勉強をしているらしい。

菜奈は絵を褒められて照れ笑いを浮かべるが、すぐに真剣な表情になつた。

「それで、あの女人のことなんだけどね……」

全員が菜奈のほうを見る。

菜奈は、机の上に置いてあつたスケッチブックを手に取つた。

「昨日、お兄ちゃんが全然信じてくれなかつたから、その人を絵に描いて見せたの」

それでも、兄は信じてくれなかつたらしい。

菜奈は「これよ」と言つて、スケッチブックに描かれた絵を見せた。

そこにはツバ広の帽子を被り、ワンピースを着た、髪が腰元まで届くような手足の長いおんなひとが描かれていた。

となりに横断歩道の信号機も描かれている。背はその高さと同じぐらいだ。

「帽子とワンピースは白色だつたわ」

「これが都市伝説の怪人なのね。夏純ちゃん、どういう怪人かわかる?」

「菜奈の言葉を聞き、由加里は夏純に尋ねた。

夏純は頭をかしげた。

「こんな怪人、知らないかも」

夏純は都市伝説が好きだけれども、何でも知っているわけではない。

すると、光一郎がスケッチブックを手に取つた。

「もしかしてとは思つていたけど、やっぱり、こいつだつたのか」

「光一郎くん、その怪を知つてるの?」

琴葉の言葉に光一郎は大きくうなずき、怪の名前を言おうとした。

そのとき、部屋のドアが勢いよく開いた。

「菜奈! スマホの充電バッテリー貸してくれ!」

制服を着た体格のいい男の子が部屋に駆け込んで来た。

「お兄ちゃん」

「絶対に見つけてやる。――『八尺様』を!」

琴葉たちが聞き慣れない名前に戸惑う。

こうとした。

「絶対に見つけてやる。――『八尺様』を!」

「昨日充電するの忘れててさ。残り十バーセントなんだよ」

信宏は棚に置いてあつた携帯用の充電バッテリーを手にすると、そのまま部屋を出て行つた。

「だが、光一郎だけは違つた。

「あれが、今どこにいるのか知つてるんですか!」

「光一郎はすごい剣幕で信宏に迫つた。

「ちよつと、光一郎くん、いきなりどうしたの?」

琴葉があわてて尋ねると、光一郎が答えた。

「陣内さんが見たという背の高い女――、その名前こそが、八尺様なんだ!」

しばらくして。

琴葉と光一郎は、道路を歩いていた。

「ねえ、光一郎くん、ほんとに八尺様は危険な怪なの？」

前には、充電バッテリーを差したスマホを持った信宏が歩いている。

「ほんとは、彼にも家にいてほしかったけど」

光一郎は神妙な顔つきでそう言った。

八尺様は先ほど、夏純たちに今すぐ家に帰るように言つたのだ。

八尺様は凶暴な怪で、人を見ると襲いかかって来るらしい。

とくに子供が嫌いらしく、子供を見るだけで見境なく攻撃して来るという。

光一郎は、信宏にも家にいるように言つたが、彼は聞き入れてくれなかつた。

絶対に動画を撮つて、バズらせてやるんだ」

信宏は歩きながら、スマホを見て意気込む。

彼はよく動画を配信しているらしい。

動画が話題になつてバズると、それだけでクラスの人気者になれるという。

今まで、ダンス動画やチャレンジ動画、ドッキリ動画にペット動画と、ありとあらゆる種類の動画をアップしてみた。

しかし、まったくバズらなかつたそ�だ。

「今回はみんなが注目する。八尺様の動画さえ撮れれば絶対に！」

信宏は八尺様の動画を撮り、人気者になりたいと言つた。そのため、家にいることを拒んだのだ。

「だけど、どうして急に八尺様がいるつて信じたんですか？」

琴葉はそれが疑問だつた。

菜奈の話によると、信宏はまったく信じていなかつたのだ。

「それに、八尺様の名前まで知つてるなんて」

すると、信宏がチラリと琴葉たちのほうを見た。

「みんなが言つてたんだよ。本当に二メートルを超える女を見たつて」

信宏は菜奈の話をまったく信じなかつたが、今日学校に行くと何人もの生徒が同じよう目にけていたという。

「となりのクラスの生徒が、それはたぶん八尺様だつて言つたんだよ」

「どうやら、夏純と同じよう都市伝説が好きな人物がいたらしい。」

信宏の学校では八尺様の話で持ちきりになつた。

「君たちも危ないと思つてるんなら、さつさと家に帰つたほうがいいよ。俺は八尺様を見つけるまで帰るつもりないから」

信宏はそう言うと、意気揚々と歩いて行つた。

「彼が危険な目に遭わないようにしないと」

光一郎は、彼を守りながら八尺様を探すしかないと考えていた。

「ひとつ疑問があるんだけど」

琴葉はふと、光一郎に話しかけた。

「菜奈さんが言うには横断歩道で見かけたとき、八尺様はすぐに逃げちゃつたんだよね？」

「ああ、それは僕も不思議に思つていた。八尺様は凶暴な怪のはずなんだ。逃げるなんて

あり得ないとと思う」

背の高い女だと聞いても、菜奈が描いた絵を見るまでそれが八尺様かどうか光一郎が確認してなかつたのは逃げたと聞いたからだ。

「凶暴な怪なのに、凶暴じゃないのかもしれないかあ」

琴葉は、最初に出会つたテケテケを思い出した。光一郎はテケテケのことも凶暴な怪だと思つていた。

だが、実際は大人しい怪だつたのだ。

「今回もそうかも」

琴葉はそれを光一郎に伝えようとした。

ブウウ、ブウウ……

刹那、光一郎のポケットの中からバイブ音が響いた。

光一郎はハツとすると立ち止まり、ポケットからスマホを取り出し、電話に出た。

「はい。光一郎です、——父さん」

電話の相手は、光一郎の父親のようだ。

「はい。そうです。この町に八尺様が現れたみたいで。はい。僕と遠野琴葉さんの一人で

できます。必ず八尺様を元の世界に帰します」

光一郎は姿勢を正し、宣言するかのように父親に言う。

その姿はまるで師匠と弟子だ。

光一郎が昨日言つていたように、親と親しくしたことはないのだろう。

やがて、電話を切つた光一郎は、自分に言い聞かせるかのようにつぶやいた。

「今度こそ必ず……」

「光一郎くん……」

光一郎は、怪帰師として一人前であることを証明したいのだろう。

光一郎は小さくうなづくと、再び歩き出そうとした。

「えつ」

見ると、前を歩いていた信宏がいない。

「信宏さん、どこに行つたの？」

「え？ あ、ほんとだ。知らない間に行つちゃつたのかも」

二人は急いで信宏を追いかけようとした。

うおおおお！

前方の曲がり角のほうから大きな声がした。

信宏の声だ。

「まさか、八尺様と遭遇したんじや!?」

琴葉たちは、あわてて道路を曲がつた。

すると、信宏が前方にいた。

彼の前には、小太りの青年と、細くてメガネをかけている青年が立つていた。

「八尺様じやない？」

「ああ～！」

声をあげたのは、琴葉だ。

「琴葉ちゃん、どうしたの？ 八尺様を見つけたのかい？」

「そうじやないよ、あの人たち、マルサンカクーズだよ！」

「え？」

マルサンカクーズとは、人気の大学生動画配信グループだ。

「どうしてこんなところに？」

琴葉が驚いていると小太りの青年が顔を向け、ニヤツと笑つた。

「やあ、君たちもオレたちのサインが欲しいなら、色紙をちゃんと持つてくるんだZ.E」

「Z.Eが出た！」
の信宏が興奮する。

「琴葉ちゃん、ZEって何だい？」

「たしか、マルサンカクーズの丸井さん
の口癖だつたような。もうひとりの三角
さんのはうは」

細くてメガネをかけている青年が二
ヤツと笑つた。

「オイラの口癖は、言葉の最後にYOつ
てつけることだYO！」

「生YOが聞けた！」

信宏はますます興奮して満面の笑みを
浮かべた。

「そんなにうれしいことなのかな……？」

普段動画をまったく見ない光一郎には
わからない感覚だ。

琴葉も会えて驚いたものの、さすがに
浮かべた。

信宏の興奮ぶりには引いてしまつた。

そんな琴葉たちをよそに、信宏は丸井たちの握手を求めた。

「俺、陣内信宏つていいます！ いつも動画見てるつす！ めちゃめちゃ大ファンつす！」

どうやら先ほど大きな声をあげたのも、彼らを見つけたからだつたようだ。

「だけど、この町で何してるんすか？？」

信宏が不思議に思うと、丸井がニヤツと笑つた。

「この町に、八尺様がいるって聞いたんだZE」

マルサンカクーズの一人には、毎日のようにファンからいろいろな情報が寄せられるら
しい。

昨日、この町で八尺様を見かけたという情報があつたのだという。

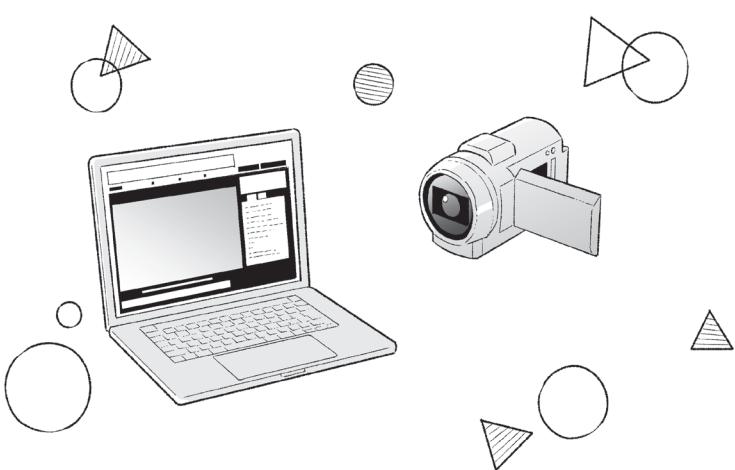
「ちょうど、近くの町で美味しいお店の紹介動画を撮つてたんだYO。そんなとき、八尺

様が出たつてメツセージをもらつて。面白半分で探してみることにしたんだYO」

「そうしたら、本当に八尺様に出くわしたんだZE」

「出くわした？？」

マルサンカクーズの一人はスマホで動画を撮りながら、八尺様を必死に追いかけたのだ



という。

「だけど、動画で撮る前に逃げちゃったYO」「だから、今日は絶対に捕まえてやるんだZE」「すごいすごいすごい！」

それを聞き、信宏は満面の笑みを浮かべた。

「俺、お二人を案内するつす！ 町にくわしい奴がいたほうがいいでしょ!?」もし八尺様を見つけたら、俺も協力者として動画に出してほしいです！」

「おお、もちろんだZE！」

（

「信宏くん、一緒に特ダネ動画をゲットしてバズっちゃおうYO！」

「おおお、絶対バズりたいっす！」

マルサンカクーズの二人が駆け出す。信宏もそれに続く。

「あ、ちよっと！」

「琴葉ちゃん、僕たちも行こう！」

「うん！」

琴葉と光一郎はあわてて彼らを追つた。

怪のいる場所

「うくん、全然いないつすねえ」

琴葉たちは、信宏たちとともに町のあちこちを探した。

しかし、八尺様の姿はどこにもなかつた。

一同は駅前までやつて来た。

「昨日は結構目撃されてたんすよお」

信宏の言葉に、マルサンカクーズの一人はうなずく。

「どこかに隠れてるかもしれないYO」

「ああ。隠れてる場所さえわかれば、スマホで撮影してやるZE」

二人は互いにスマホを構え、ニヤツと笑つた。

すると、光一郎が彼らの前に立つた。

「これ以上、八尺様を刺激するのはやめてください」

光一郎は一人をにらむよう見つめる。

「何だい、君は特ダネを独り占めする気かYO？」

三角がメガネを指でクイッとあげながら、そう尋ねた。

「そんなことするわけがないでしょ」

光一郎は真剣な表情できつぱりと答えた。

「僕は、あなたたちの心配をしているんです。八尺様がどうしておびえているのかはわからない。だけどあれは凶暴な怪です。変に刺激したら、襲いかかってくるかも知れない。

きつとあなたたちは大怪我をしてしまった。

光一郎は町並みを眺めた。

「僕は、怪を元の世界に帰す怪帰師です。だけど、怪を帰すことだけではなく、人々が怪によつて不幸にならないように食い止めたい思いもあります。だから、あなたたちに怪我をしてほしくないんです！」

「光一郎くん……」

琴葉は、光一郎の思いを知り、大きくなずいた。

「私も同じです。今すぐどこかに避難したほうがいいと思ひます！」

「き、君たち何だYO」

「怪帰師なんて聞いたことないZE」

「いいから、これ以上探すのはやめてください」

光一郎は丸井と三角の持つているスマホを降ろさせようとした。そのとき――、

「あっ！」

と、信宏が声をあげた。

「そうだ、あそこなら誰にもバレずに隠れられるかも！」

「えっ!? どこだYO？」

「オレたちに教えるんだZE！」

丸井と三角は光一郎を押しのけ、信宏のそばに駆け寄つた。

「わつ」

光一郎くん！」

琴葉はよろけた光一郎のそばに行く。

一方、信宏は興奮ぎみにその場所を丸井たちに教えた。



琴葉は彼らの態度に戸惑う。
光一郎は心配して言ったのに、まつたく理解してくれなかつた。

「このまま放つておくわけにはいかない。彼らが怪我をする前に、八尺様を元の世界に帰すんだ」

「あんな人たちでも助けないといけないの？」
琴葉の言葉に、光一郎は「当然だよ」とはつきりと答えた。

「どんな人だろうが、怪のせいで不幸になるのを、僕は黙つて見ているつもりはない。怪人が人々を不幸にするのを食い止める。それが怪帰師の仕事だ！」

光一郎は怪帰師の仕事に強い使命感を持つてゐる。

駄から少し行つたところに廃工場があるんすよ。あの辺りは普段から人があんまり近づかなくて。しかも、工場の扉は鍵がしまつてないんすよ」「おお、そこなら隠れることできそうだZ.E.！」

「行つてみようY.O.！」

「だからそういうのは危険で——」「うるせえつ！」

注意した光一郎は、丸井と三角は同時に怒鳴つた。

「こつちは切羽詰まつてんだ！」

「この動画で、トップ配信者に返り咲かなきやいけねえんだ！」

二人はZ.E.もY.O.も言わず、眉間にしわを寄せながらすごむ。

「信宏くん、今すぐその場所に案内して！」

絶対動画に撮つてやる！

「は、はいっす！」

信宏はその迫力にたじろぎながらも、廃工場のほうへ走つて行つた。

「そんな」

琴葉はそんな彼の力になりたいと心の底から思つた。

そのとき、背後から声がした。

「あら、琴葉」

見ると、琴葉の母親が駅の改札口のそばに立つてゐる。

仕事が終わつて、電車に乗つて帰つて来たのだ。

「そんなところで何してゐるの？」

「あ、ええつと」

「まさか、光一郎くんとデート?！」

「そんなじやないつてば！」

「またまた、別に隠さなくともいいのよ。あ、そうだ。琴葉から聞いたんだけど、光一郎くんは親御さんのお仕事の関係で、ひとりで暮らしてゐるのよね？」

「は、はあ」

「だつたら、今夜夕食を一緒に食べましょよ。今からスーパーに行くところだつたの。

おばさんお料理上手よ。いちばん得意なのはハンバーグ。一緒に食べましょ！」

母親は、駅前にあるスーパーのほうへ歩き出そうとした。

「だが、琴葉が怒鳴つた。

「お母さん、いい加減にして！」

「琴葉……」

「私たち今は今から行くところがあるの！」

「こんな時間からどこに行くのよ？」

「それは、あの」

「廃工場です」

光一郎が母親の目をまつすぐ見て答えた。

光一郎くん、わざわざ言わなくていいんだつてば」

「え、そうなのかい？」

琴葉がしまつたという顔をしていると、母親が急に真面目な表情になつた。

「ちよつと、あそこは人通りもないし、こんな時間から行くのは危ないわよ」

「それはわかつてゐんだけど、行かなきやいけないの」

「どうして??」

「それはええつと、ああんもう、とにかく飯は適当でいいから！」

琴葉は、「すぐ帰るから」と母親に伝えると、光一郎の腕を引っぱってその場から走り出した。

「琴葉ちゃん、いいのかい？？」

「こんなときにお母さんに構つて暇ないよ！」

母親は相変わらずうつとうしい。今は信宏たちのほうが重要だ。

「急がなきや！」

琴葉たちは走るスピードを上げた。

「ここだよ」

やがて、琴葉と光一郎は、廃工場の前にやつて來た。

駅からは、歩いて五分もかからない。

しかし、辺りに住宅はなく、帰宅時間帯にもかかわらず人通りもまつたくなかった。日が落ち、すでに薄暗くなっている。

信宏さんたち、もう中に入つてゐみたいね」

入り口のさび付いた鉄の門が少しだけ開いている。信宏たちが開けたのだろう。

「彼らより早く八尺様を見つけ出さないと」

二人は工場の敷地に入ろうとした。

「そつちに逃げたつす！」

突然、工場の中から信宏の声が響いた。

「まさか！」

八尺様をすでに見つけたのかもしれない。

琴葉たちはあわてて門をくぐつた。

もう一体の怪

工場の中では、信宏たちが必死に走つていた。

「どつちに行つたんだYO!？」

「そつちつす！」

「今度は逃がさないZE！」

三人はスマホで動画を撮りながら、工場中を走り続ける。

すると一瞬、人が横切つた。

姿は人そつくりだが、普通の人とはまつたく違う。

工場は機械がそのまま放置されているが、その人物は、それらの機械よりはるかに背が高かつたのだ。

「いたＺＥ、八尺様だ！」

ボオオ、ボボボオオ……

ツバ広の白い帽子を被つた八尺様が、長い手足を必死に動かし、信宏たちから逃げてい

た。

八尺様は右側にある出入り口、鉄の扉のほうへ逃げようとする。

だが、行く手を丸井がふさいだ。

それを見て、八尺様は左側にある鉄の扉のほうへ走る。

しかし、その扉の前にも二角が現れ、ふさいでしまった。

丸井と信宏も、取り囮むかのように近づいて来る。

ボオオオ……

八尺様は壁際に追い詰められ、その場にうずくまつてしまつた。

「ほんとに、いたＺＥ」

「信宏くん、ナイスだつたＹＯ」

「力になれてうれしいです！」

丸井と三角はうずくまり震える八尺様を見てニヤつと笑う。

「スミ、これは特ダネだな」

「ああ、マル。オイラたち、最近全然バズつてなかつたもんな」

「これでオレたちも、人気動画配信者に返り咲けるはずだ！」

二人はスマホを向けると、ゆっくりと八尺様を動画で撮ろうとした。

「やめろ！」

丸井たちが振り返ると、少し離れた場所に光一郎と琴葉が立っていた。

ようやく丸井たちのもどへたどり着いたのだ。

「なんだ、また君たちか」

「オイラたちの邪魔すんなつて」

丸井と三角はあきれながらも苛立つと、信宏に声をかけた。